

『故郷の風に誘われて』

—空翔ける羊飼いの群れシリーズ 3—

第一章 「風の便り」

季節は夏…。今日は朝から雲一つなく、日差しがとっても強い。だが、不快になる程ではない。それもそのはず、これは POWLA-MAC の気象管理機能の一つなのだから。POWLA-MAC は人間が快適に生活できるように常にコントロールしてくれるのだ。

都市から結構離れているこの辺では、もう建物と言える程の建物は見当らず、ただっ広いオレンジ畑が視界いっぱいに続いている。今がちょうど収穫の時期なのか、木にはたわわにオレンジが実っている。

そのオレンジ畑の真ん中で麦わら帽子の人影が、オレンジを一つ一つ確認するように丁寧に木からもいでは傍らにある籠に入れていた。時折、顔を上げると額の汗を手で拭う仕草をしている。しかし、その表情には辛さなどは微塵も見られない。

「和岐さーん。」

少年がオレンジ畑の中を走ってくる。彼もまた麦わら帽子をかぶっている。

和岐と呼ばれた男はちょっと顔を上げて、笑顔でその少年を迎える。

「どうした？」

普段走ったことなんかないのか、さほど全力疾走していたようにも見えなかったが、少年は肩でハアハア息を吐いてなかなか話すことができない。

「どうしたんだ？」

和岐はそんな少年の姿を見て笑いながら、さっきよりも幾分か優しい声でもう一度訊ねてみる。

「和岐さんに男の人から電話がかかっている。緊急だと言っていた。」

一瞬、和岐の表情から笑顔が消える。

「分かった。ありがとう。」

少年の麦わら帽子をポンッと軽く叩くと、和岐は少年がいま来た方へと走り始める。少年の方はもう用が済んでホッとしたのか、今度は和岐の後をゆっくり歩いていく。

和岐にはいま電話をかけてきている相手が誰なのか、まるで見当がついていなかった。ただ、それが誰であったにしても、和岐にとってその電話がいい話しでないだろうということは容易に想像がついていた。

彼が地球を出てからもう2年余りが過ぎ去っている。しかも既に彼が消息を断ってから1年近くになる。地球の知り合いがここに電話をかけてくるはずがなかった。ただ、一応調べれば分かる程度の手がかりは残してきてある。本当に地球に何かあったのなら彼らはどんなことをしてでも和岐の行方を捜したことだろう。

まあ、あくまでもそういう可能性もあるということだけである。

和岐は一度自分の家に戻り、麦わら帽子を置いてから隣の地主の家に向かう。

「失礼します。」

「あら、どうぞ。なんか急ぎの用らしいですわ。さあ、早く。」

地主の奥さんは部屋の奥にある白い電話機を指差す。

「どうも…。」

和岐は軽く頭を下げて部屋に入ると、受話器を持ち上げた。それから、一回大きく深呼吸をする。

「もしもし、和岐ですが。」

「*POWLA* が危ない。すぐ地球に戻れ。」

「は…？」

「もうすぐ *POWLA* が破壊される。」

「何を言っているんだ。あなたは一体誰なんですか？」

和岐の声が少し大きくなる。

「君の古くからの友人だ。まあ、信じるか信じないかは君の自由だがね。」

電話の相手はそれだけ言うと切ってしまった。

和岐は暫くそのまま受話器を持ったまま、何やら難しい表情で考え込んでいた。その表情はあの優しいような目を持ついつもの和岐とはまるで別人だった。

「和岐さん、どうしたの？」

やっと追い付いてきた少年が、そんな和岐を見て心配そうに声をかける。

「いや、なんでもないよ。」

「だって、恐い顔してる。」

ハツとして、思わず顔に手をやってから、和岐は苦笑いしてしまう。

「いや、本当に大丈夫だよ。昔の仕事仲間から難しいことを頼まれたんで、ちょっと考えていたんだよ。」

「ここから出ていくの？」

「分からない。まだ、決めてないからね。でも、いずれ決めなければならないと思う。」

「ずっとここにいなよ。ここで一緒にオレンジを作ればいい。」

「ああ、そうしたいな。」

そう答えながら、少年の頭をポンッと叩いた和岐の表情は、もういつもの優しい目を持った和岐だった。

「片付けてくるよ。まだ荷物を畑に置いたままだ。」

「一緒に行く。」

少年は走っていく。その様子を見ながら、和岐は一つの未来を予感していた。たぶん、近いうちにここを出ていこう自分を。

第一章 「風の便り」

H. 6. 22. MAR

第二章 「東風吹かば」

久しぶりに信州の街並みを見て、私は少しばかり興奮していた。もうここを出てから8年も経ってしまったことを実感したから。本当はもっと早くここに帰ってきたかったのかもしれない。この街も私がいた時とは比べものにならない程、色々な面で便利になったことが分かる。それがいいことなのか悪いことなのか今の私には分からないが…。

ゆっくりと駅からの通りを歩いてきて、やがて見覚えのある建物が視界に入ってくる。私がここを出た時とそのままの建物だ。あれは私の友人が設計したもので、何ヶ所か私の意見を取り入れて貰っている。友人に言わせると単に私の我が侷ということだったが。そんなことも今はただ懐かしい思い出になりつつある。

「局長に会いたいのですが。」

連邦政治局信州支局、受付の女性にそう伝える。

「アポイントはお取りですか？」

「いえ、取っていません。和岐が来たと言って戴けば分かると思います。」

「はい。では少々お待ち下さい。」

受付の女性が確認を取っている間、私はポーッとエレベーターの表示を眺めていた。4階から誰かが降りてくるらしい。表示がだんだんと1階に向かって近づいてきている。

「和岐様。」

「はい。」

「大変申し訳ありませんが、局長はただいま不在ですので、改めておいで戴けますか？明日には戻るそうですので。」

「局長はどこへいらしているんですか？」

「それは…。」

局長が自分の局を離れるなんてことは、まず緊急事態でもない限り普通はあり得ない。言いにくいのは当たり前か…。

「いえ、失礼しました。では、明日の正午にまた来ますのでお願いします。」

「はい、承知致しました。そう伝えておきます。」

明らかにホッとした表情を作られてしまった。

まあ、仕方がない。どこか適当にブラブラしようと思いきや、降りてきたエレベーターのドアが開いて、中から数人の男女が出てきた。その中に私の知っている顔がいなければと願いつつ、その場から離れようとする。しかし、不幸なことに知っている顔が一人いるのを見つけてしまった。しかも、普通ならここにいるはずのない女性が…。

できることならここに来たことは局長以外には知られたくなかったんだが、その女性にはどうしても伝えておきたいことがあった。ええい、仕方がない。私は自然にその女性を追いかけていた。

その子は建物を出ると小諸駅の方へ向かってゆっくりと歩いていく。どうも、その様子からも何かあったような感じを受けて、だんだんどうしても話しをしなければいけないような気になっていた。

「湯浅中尉…。」

連邦政治局の建物が完全に見えなくなった所で、ようやく後ろから声をかけてみた。

「はい？」

明子ちゃんは不思議そうにゆっくり振り返って、そして大声を上げた。

「和岐さん！」

明子ちゃんの表情には、懐かしさでもなく、嬉しさでもなく、ただ安堵感がそこに浮かんでいた。

「キャティにいたんじゃないかったのか？」

「ええ、色々あって…。」

「まあ、立ち話もなんだから、どこか喫茶店でも入ろう。」

私は明子ちゃんを促して、私が昔よく通った喫茶店に連れていく。

意外なことに店内の雰囲気は昔のままで、メニューは少しも変わっていなかった。ただ、あの年取ったマスターはもういないらしい。店に入った瞬間にこれらのことを観察すると、私は一番奥の4人掛けのテーブルに腰を降ろした。この店では昔はここが私の場所だったのだ。

「はい、いらっしやいませ。オーダーはお決まりですか？」

若いマスターが水とおしぼり、それにアーモンドの入った小皿をテーブルの上に並べていく。

「何にする？」

「えーっと、それじゃあ、ミルクティーをお願いします。」

「私はシナミック。」

「はい、かしこまりました。」

オーダーも昔と同じ物を頼む。昔はこれが飲みたくてここに通っていたようなものだったのだ。

「Myaは元気ですか？あの子、最近まったく連絡してこないから。」

やっぱり…、訊かれると思った。私がどうしても明子ちゃんに伝えたかったこともこのことだったのだ。

「もう美和ちゃんが私から離れて半年にはなるかな。湯浅中尉には一言も？」

「ええ、あたしも柴ちゃんもてっきり和岐さんのそばにいるものと思ってましたから。何かあったんですか？」

「あったかもしれないし、なかったのかもしれない。彼女が私から離れた理由については、私ではなく彼女に訊いて欲しいね。もし、会うことがこの先あればだが。」

「そうですか…。」

実際、彼女が何を考えていたのか理解しようとしていなかったし、理解できたこともなかったと思う。彼女がどういう結論から私のそばから離れたのか、一番知りたいのは私の方だった。本当はその理由が明子ちゃんから聞けるんじゃないのか、そんな気がして話しがしたかったのだ。しかし、その結果は残念にも打ち砕かれてしまったようだ。

「ところで、どうしてこっちに？湯浅中尉はまだキャティの任務に就いているんだと思っていたんだが。」

私がちょうど話題を切り替えたところで、マスターが紅茶を運んでくる。

「三好少尉が殉職したんです…。ちょうどキャティに来ている時の事故でした。私はその事故の報告と葬儀のために今だけ局付きの身分なんです。」

「そうか…。しかし、またなんで？」

「シュレを捜して小惑星帯に入ったんです。彼の乗っていた船が操縦の慣れていない船だったこともあって、たぶん操縦ミスじゃないかと…。」

あの三好くんが…。いい青年だったんだが、惜しいことをしてしまった。あれほど宇宙に出られる

ことを喜んでいた奴はいなかったんだが。

数年前、情報部への配属を誰にするか思案していた時、佛木局長からの強い推薦で彼を情報部に移したことを思い出した。それから暫くの間、彼を情報部にしたのは間違いだったような気がしてモニターしていたら、まんまと自分が騙されてしまい見直した覚えがある。

「そうか…、あの事件の時のメンバーが揃うことはもうあり得ないんだな。」

たとえ全員が生きていたにしても、連邦政治局に身を置く以上はまず同じ顔ぶれで仕事をする事なんかまずない。そのことを一番知っているのは自分のはずだったのに、ついそんな言葉を口に出してしまった。

「和岐さん、なんとなく雰囲気が変わりましたね。」

「そうか？」

「ええ。」

それだけ時間が流れたということなんだろう。

明子ちゃんはそれから暫く何も言わずにミルクティを飲んでいて。私も何も言わなかった。ただ、静かな音楽だけが流れていく。

「和岐さん…。」

「ん…？」

実際にどれくらいの時間が流れたのだろうか。心地好いメロディとシナモンの香りの中で時間の感覚を失いかけた頃、明子ちゃんがようやく口を開いた。

「和岐さんが木星に出発した日、*Mya* から1枚の何も書いていないフロッピーディスクを貰ったんです。」

「彼女は何か言っていたか？」

「ただ持っていて欲しいって、それしか言いませんでした。」

「それで？」

「あたしと柴ちゃんとでどうするか考えた挙げ句、*Mya* からの連絡が1年以上途絶えてしまったらこれを見ようということにしたんです。」

「では、もうそのディスクの中は見たんだね。」

心臓がドキドキと脈打っているのが分かる。まさかこんな形でこの話しを切り出されるとは思っていなかったの、何の心の準備もしてなかったのだ。

「はっきり言って *Mya* がなんで和岐さんについて行くなんて言い出したのか私には分からなかったんです。でも、なんとなくそれが分かったような気がしました。それと自分達の階級が、他の人に比べてちょっと高いことも不思議だったんです。でも、それについても納得しました。あとはただ一言和岐さんに言いたいことがあるだけ。」

湯浅中尉、柴野中尉、桂中尉、彼女達3人は厳密な意味では人類にはならない。本来なら実験体として捨てられるはずの物だった。しかし、私にはそれができなかったのだ。彼女達を人類として余計な不幸を背負わせてしまったのは私の責任以外の何物でもない。

いつかこんな日が来ることを予感していた。そして、自分が謝罪することしかできないことも知っていた。

「和岐さん…、ありがとう…。」

「えっ…？」

「どういう理由だったにせよ、あたしはいま生きていることがとても嬉しいんです。だから、だから…、こういう言葉を2度も言わせないで下さい。」

ちょっと口を尖らせて、フィと横を向いてしまう。

しかし…、いや、そういうことにしておこう。これで少なくとも肩の荷が半分は降りた訳なんだから。

「ありがとう。」

そっと繰り返して、私はシナミックを飲み干した。

第二章 「東風吹かば」

H6. 22. MAR

第三章 「風の通り道」

翌日、ホテルで目覚めた私の手元に新聞が届けられた。木星での生活は、意識して地球の話題には触れないようにニュースから遠ざかっていたので、初めてファズアース彗星について知るところとなった。それと、最近 POWLA の故障が多いことも…。

少なくとも例の電話で言っていた「POWLA が危ない。」というのが嘘でない程度の確証は得られた訳だ。しかし、相手がまだ誰か見当もついてない状況で、鵜呑みにするほど馬鹿でもないつもりだった。こういうときほど、自分の中にある予知能力なんて中途半端な能力が邪魔に感じることはない。

今日は正午まで予定がなかった。昨日の時点では何も考えていなかったのだが、こうなると昔の血が騒ぎだす。午前中は情報集めだ。そう決めてしまうとなんとなく心も軽くなったような気がする。まずどこへ行くか、頭の中で小諸の街を掛け巡ってみる。そうして一人の老人の顔を思い出す。

「まだ生きていますか？」

口に出してみても思わず苦笑してしまう。そんなことまで考えてみたって分かるはずがないのだ。とりあえず行ってみよう。

その老人の名前は知らなかった。ただ、その昔は「サンタクロース」と呼ばれていたことだけを覚えている。私がまだこの科学部に籍を置いていた頃何かと世話になったが、なによりも連邦委員長になるために一早い情報を貰えたことがありがたかった。

そういえば彼とは連邦委員長になった後、一度も会っていない。

ホテルを出てブラブラと歩いてみる。小諸の街もこうして実際に歩いてみると意外に変わっていないことが分かる。というか、建物が変わっても雰囲気そのままなのである。関東が全滅した時、誰が一番最初にここを首都と決めたのかは知らないが、それを決めた人間はこの街をよく知っている人間に違いない。

「おはようございます。」

その昔、サンタクロースがよくいた喫茶店を見つけて入ってみた。彼はいつもこの入口に近い席で入ってくる人間を観察していた。

「ミルクティをお願いします。」

だいたい 50 才くらいか、眼鏡をかけた初老のマスターが水とおしぼりを置いていく。

「あ、それとサンタクロースを一つ。」

「はい…？」

マスターは怪訝そうに振り返ってみせるが、私はそんなマスターには気がつかない振りをして雑誌の方に手を伸ばしていた。

これでいい。これで私が昔のやり方を間違えていなければ、向こうの方から現われるはずだ。彼はそういう人間だったのだ。

偶然手にした雑誌にはファズアース彗星についての色々な憶測が書いてあった。しかし、そうしたマスコミの情報のどのくらいが真実なのか、幸運なことに私は痛いほどよく知っていた。ただ、今となってはここにウインダムがいないことがとても寂しかった。

ウインダムは美和ちゃんが連れて行ってしまったのだ。もう私の元に戻ってくることはあるまい。もし、私がまたこの世界に戻るならば、新しい相棒を見つけなくてはならないだろう。

「しかし、ウインダム以上の奴なんて…。」

そう口に出してしまった自分に気が付いて、慌てて目の前の水を飲み干す。

「お待たせ致しました。確かミルクティでしたね。」

マスターがそう言いながらニタニタと薄笑いを浮かべてミルクティを私の前に置いた。私は一瞬いまの台詞を聞かれたような気がして、思わず目を逸してしまう。

「さあ、冷めないうちにどうぞ。」

「はあ…。」

どちらかというと早く向こうへ行って欲しいという私の願いとは裏腹に、マスターはなぜか私の前に腰掛けてしまう。

「最近、この店に来る人もいなくなりましてね。私もすっかり隠居の身ですよ。」

「はあ…。」

なんなんだ？訊きもしないのに訳の分からないことを喋り出して。

「おや、まさかまだ気が付かないんですか？あれほど教えておいたのに、もう忘れてしまったんですかねえ。」

その口調、よく覚えている。いや、忘れるはずがない。そして、その後は必ずこう続くのである。

「人を身なりで判断するな。本質を見抜かなければ人の上には立てない…。」

まさか、まさか、だって…。どう見たってあの時より若く見える。

「ほう、よく覚えているじゃないか。じゃあ、私のことも見違えて分からなかったなんて言わないでくれよ。」

「サンタクロース！」

「しーっ！もうその名前だった奴は死んだんだ。今はハスラムと呼んでくれ。」

サンタクロース…、いやハスラムはそう言ってニヤッと笑う。あっという間に顔が変わる。情報部の変装キットなんか比べ物にならないほどだ。

「暫く顔を見なかったようだが、月か火星あたりにでも行っていたのか？」

「ええ…、いや、木星です。」

変装を解いたハスラムの顔は、この私とたいして年齢が変わらない。私が今まで知っていたサンタクロースといま目の前にいるハスラムと、情けないことにいったいどっちが本当の彼の顔なのか分からなかった。

「分かっているようだな。サンタクロースは死んだんだ。奴のことは忘れたまえ。いま君の前にいるのは、君の古くからの友人だ。違うか？」

ハスラムに言われてハッとする。以前も同じことを言われたのを思い出したのだ。あれは初めてサンタクロースに会った時だ。

頭を切り替えなくてはこの男にはついていけない。私は彼を連邦政治局時代の友人ということで頭の中に描いた。本当の姿よりいま目の前にいるこの男を認めないことにはこの男は私の存在を認めないだろう。

深く息を吸った。こいつは私の学生時代からの友人だ。いや、親友だったんだ。そう無理矢理決めてしまった。

「力を貸してくれ。ファズアースの情報が欲しいんだ。」

「ファズアースは高くつくぞ。」

「構わない。明日迄に揃えて欲しい。できるか？」

「できるか…だと？相変わらず失礼な奴だ。」

ハスラムは少し苦笑する。以前、私がサンタクロースに言ったことを覚えていたのかもしれない。だが、そんなことは今はどうでもいいことだ。

「しかし、3日間待て。それまでに必要な情報は揃えてやる。その代わりに、こっちからも一つ頼みがある。」

「なんだ？」

「連邦政治局に入りたい。できれば情報部がいい。いや、情報部でなければ駄目だ。」

「やってみよう。」

確かに高い取り引きかもしれない。しかし、いまはこの男だけが信頼できる唯一の知り合いだった。私は彼に聞こえないように心の中で呟いた。

第三章 「風の通り道」

H6. 22. MAR

第四章 「疾風抜ける」

ちょうど正午に私は局長室の前に立っていた。もちろん、受付の女性は私のことを覚えていてくれて、名前を告げるまでもなくここまで案内してくれた。

「入りたまえ。」

中から無愛想な声が聞こえてくる。頭も下げずに部屋に入ると、相変わらず苦虫を噛み潰したような顔をしている。それでも私は彼が機嫌がいいのがすぐ分かった。何か良い知らせが入ったのか、それともただ私が訪ねてきたからなのかそこまでは分からない。

「久し振りだな。今まで何をしていたんだ？」

「オレンジを作っていたんですよ、木星で。」

「で、なんの風の吹き回しでここへ来たのかね？おそらく君に取って一番思い出したくない場所だろうに。」

明らかに局長は楽しんでやっている。

「*POWLA* を助けに来たんです。」

「*POWLA* を？ほう、*POWLA* が君の所に助けてくれとでも言ってきたのかね。」

「ええ、そんなところです。」

「では、これを持っていきたまえ。」

局長は引出しから何か取り出すと私の前に置いた。

「何ですか？」

「君がここにいる間は必要なものだ。その他に必要な物があれば、受付の女性にでも伝言してくれ。」

私は自分の前に置かれたそれ、IDカードを手にとって眺めた。

「科学部付き…ですか。せめて少佐くらいは頂けると思っていたんですが。」

「臨時扱いだ。いくらなんでもそこまで特別待遇はできんよ。あとは室長にでも文句を言ってみるんだな。」

「いえ、感謝しています。でも、できればもう一つIDカードが欲しいのですが。」

「もう一つ？」

「ええ、私の協力者です。希望としては情報部の部付き扱いにしてくれるとありがたいのですが。」

「ありがたいというより、そうしなければ何が起きても責任を取らんというつもりだろ。とりあえず、その人物を連れてきたまえ。話しはそれからだ。」

「ありがとうございます。」

私はたったいま渡されたばかりのIDカードを自分の服のポケットにしまい込むと、深々と頭を下げて見せた。

「形だけの礼儀なぞいらんよ。行きたまえ、後のことは室長に任せてある。」

「はい。」

私が頭など下げる人間ではないことはよく分かっているらしい。でも、一応は感謝していることを形にしたかったのだ。

局長室からそのまま科学部の部屋に向かう。もう、何年も入ったことのない部屋だ。雰囲気もすっかりと変わってしまっている。

入口で部屋の中を見回して、意外と物の配置は以前のまなことに気が付いた。ただ、誰かが開発中なのか、見たこともないコンピューターが1台だけ部屋の隅に置いてあるのがやけに気になる。今まで色々な POWLA の端末機を見てきたが、このコンピューターには POWLA の雰囲気はまるでない。

私がこの見たこともない端末機に気を取られていると、後ろの方から声が掛かる。

「どなたですか？何かここに用ですか？」

聞いたことのある声…？ゆっくりと振り返るとそこには指田大佐が立っていた。

「和岐さん！」

「やあ、久しぶりだな。君がここにいるなんて思ってもみなかった。」

「それはこっちも同じです。どうして和岐さんがここにいるんですか？」

「ちょっとね。暫くはここにいることになるだろうからよろしく。」

たったいま貰ったばかりのIDカードを指田くんに見せる。

「えっ、だって…。和岐さんは…」

「そういうものだよ。」

「はあ…」

「室長に紹介して欲しいんだけど。」

「えーっと、ちょっと待ってて下さい。いま呼んできますから。」

指田くんは部屋の中をぐるっと見回して、奥の方へ行ってしまう。たぶん、隣のプライベートルームに呼びに行ったんだろう。

しかし、指田くんがここにいるとなると話しがかなり早くなるかもしれないな。ひょっとしたら、彼なら POWLA の現状についても何か知っているかもしれないし…。

「和岐さん！」

呼ばれて振り返ると、指田くんが小柄な男性を連れてきていた。

「こちらが科学部室長の下村です。そして…」

「知ってる。元連邦委員長でしょ。」

「よろしく、暫くここで世話になることになりますから。」

「どういう理由でここに来たのか知らないけど、少なくともこの業務の邪魔だけはしないで欲しいな。それでなくても今は色々なことごと返しているし。」

余り歓迎はされていないようだ。それとも今日は機嫌が悪いのか。どっちにしても室長に睨まれるのはまずいな。

「できたら、そのここに来た理由というのを先に話しておきたいのですが、よろしいですか？」

「うーん、まあ、いいけど…」

「他人に聞かれるとまずいので、どこかいい場所があればそちらで話したいのですが、いい場所がありますか？」

「では、会議室の方で。」

指田くんの案内で小さい部屋に入る。壁には POWLA システムの色々な図面が貼ってある。しかし、それが何の図面なのかはまったく分からない。たぶん、実現しなかったものなんだろう。

「で、ここに来た理由って？」

「POWLA のことです。かなり危ない状況ではないのですか？」

「確かにね。でも、それは *POWLA-KNIGHT* が完成すればまったく問題なくなる。」

「それは *POWLA* 本体の話でしょう。しかし、実際は *NFL* や *CATELINA* とか *ANDREA* を破壊されれば意味がない。そうじゃないですか？」

「そりゃ、そうだけど…。」

「室長は *POWLA* がどこにあるか知っていますか？」

「それは *POWLA* のオリジナルということ？」

「そうです。」

下村室長はちょっと考えてから答える。

「知っていることは知っているけど、そこに実際に行ったことはないから本当にあるかどうかまでは知らない。」

POWLA 本体の位置というのは、歴代の科学部室長と局長以上の職責の者だけに教えられることになっている。もし、彼が前の室長からちゃんと引き継ぎをしているなら、その情報は正しいはずだった。

「10 日前、私の所に *POWLA* が危ないから地球に戻れとの連絡が入ったんだ。誰なのかは知らないが、調べてみると確かに最近 *POWLA* の故障が多過ぎる。理由は分かっているんですか？」

「民間の *CAPER*A システムが負荷になっているのが理由の一つ。もう一つはたぶん外部からの妨害工作。」

「ファズアースは？」

「ファズアースは関係ないと思うけど。」

しかし、ファズアースが地球に近付いてからのトラブルが多過ぎる気もする。これについてはハスラムからのデータを待つしかないだろう。

「じゃあ、あなたはもうどうしたらいいと考えるんですか？ *POWLA-KNIGHT* が完璧だとは言わないけど、これ以上の策がないんだったら口出ししないで欲しいな。」

「ない訳ではない。しかし、かなりの困難が付きまとう。それでもやってくれるなら協力して欲しい。」

一瞬、室長と指田くんが顔を見合わせる。

「そのプランを聞いてから判断して構わないのなら。」

「もちろん、そうしてくれないとこっちが困る。」

私のプランというのは、完全に現 *POWLA* システムと新しいシステムを切り離すことにあった。

「つまり簡単に言えば、*CATELINA* と *ANDREA* を使用しないシステムを構築したいんだ。」

「そんなことをしたら *POWLA* 自体が使い物にならなくなるじゃない。データベースのない *POWLA* なんて何の価値もないよ。」

「誰もデータベースを使わないとは言っていない。 *ANDREA* に代わるデータベース衛星を作るんだよ。」

「えっ…？」

「もちろん、*CATELINA* も使用しないし、*NFL* も使用しない。新しい *POWLA* は現 *POWLA* システムに依存してはいけないんだ。」

ここにきて、ようやく私の目的を理解してくれたらしい。下村室長は何か考え込んでしまった。

「プランとしては面白いけど、いったいどこでそのデータベース衛星を作るつもり？もし、ここで

作ったらすぐ外部に筒抜けになると思うけど。」

「ソルトリバー研究所なんてどうだ？あそこならたいがいの物が秘密裏に作れるはずだ。しかも、あの教授ならこういうことに向いている。」

「じゃあ、データベースの中身はどうするの？一から作るには時間が掛かり過ぎるし、第一そんなことしたくない。ANDREA からコピーするにしてもあの膨大な量じゃ、ちょっと無理があると思うけど。」

「実は ANDREA にはバックアップ用の回路がある。もちろん、これはマニュアルにも書いていないことだけど。」

「ん…？」

「1回は ANDREA に行かなくてはならないと思いますが、バックアップユニットをそのまま持つてくることができればかなりの時間短縮になるはずですよ。」

「この話し、乗った！図面はいつ貰える？」

「来週の初めにでも。でも、その前にここまでの POWLA-KNIGHT の設計図があれば見せて欲しい。」

「分かった。それはこっちですぐにでも用意しとく。」

「指田くんも協力してくれるね。」

「最初からそのつもりで同席させたんでしょ？」

「まあね。」

新しい POWLA システムか…。これで当分は忙しくなるぞ。

第四章 「疾風抜ける」

H6. 22. MAR

第五章 「風待ち草」

俺はハスラムを局長の前に連れてきていた。相変わらず不機嫌そうな表情だが、なかなか機嫌がよいのがなんとなく分かる。

「何故、情報部を希望するのかね？」

「それが自分の才能を一番活かせると思うからです。」

「証明できるかね？」

「ええ、いいでしょう。」

ハスラムは持ってきたバックの中から一束の書類を取り出して局長に差し出した。

「これは彼に頼まれていた物です。ファズアースに関するこの詳細が書いてあります。たぶん情報部なんかの物より詳しいはずです。」

局長はハスラムから書類を受け取ると暫くジッと読んでいる。

「君はこれをどこから調べてきたのだ？」

「ファズアースまで行ってきたのです。そこに書かれている内容のほとんどはリアム本人から聞いたものです。まず間違いないと考えていいと思っています。」

「すると、分からないことがある。」

「えっ…？」

「君は個人でそこまでできるなら、なぜわざわざ窮屈な組織の中に入りたがるのだ？」

ハスラムはジッと局長の顔を凝視している。

実のところを言えば、俺もそれについては聞いてみたかった。どうして、彼が急に連邦政治局に拘るようになったのか。以前はどうしても入ってくれなかったのに。

「君がカルーンのメンバーでないという証拠は？」

「身の潔白を証明できたら、入れて頂けますか？」

「それと理由があればだ。」

「分かりました。明日の同じ時間にまた伺います。すべてはその時に…。それで結構ですか？」

「ああ、いいだろう。」

ハスラムは軽く頭を下げると局長室から出ていく。

「どういうことですか？」

「情報部からの通告があったのだ。君の知っているサンタクロースは数年前に死んでいるらしい。」

「えっ…？」

「信じられないという顔だな。もし、時間があるならここに行ってみるといい。」

局長は一枚のメモを突き出す。そこには墓地の住所が書いてあった。

「それからもう一つ、佛木文化部室長に会ってきてくれ。この件は彼から聞くのが一番早いだろう。彼も実際にファズアースに行ってきている。君の質問に答えられるはずだ。」

「文化部の室長ですか？」

「ああ、そうだ。何か問題でも？」

「いえ、文化部の室長が外に出たなんて、珍しいと思って。」

「時代が変わったんだ。」

局長はそれだけ言って、ハスラムの持ってきた書類を差し出す。私はそれを受け取って、そのまま

局長室から出てきてしまった。

暫くオレンジなんかを相手にしていたせいで勘が鈍ってしまったのだろうか？それともサンタクロースには勝てないという私の先入観がいけないのだろうか？どっちにしてももう一度初めから考え直さなくてはいけないかもしれないな。

「きゃっ！」

ボーッと考えながら歩いていたせいだろうか、私はふいに飛び出してきた人を避けることができなかった。

「すいません。」

「ん、君は確か…。」

「文化部の坂田です。今度新しく科学部に来た方ですね。あっ、そうそう、指田せんぱいを見かけませんでしたか？」

「いや、私はいま局長の所からの帰りだが、指田くんはいなかったね。」

「そうですか…。」

あからさまに残念そうな顔になる。いったい何があったんだろうと、ちょっと好奇心が持ち上がってくる。

「何かあったのか？よかったら話してごらん。」

「いえ、たいしたことではないんですが、うちの *POWLA-TWIN* がまた動かなくなってしまったものですから。いつもなら室長が対処するんですけど、まだ謹慎から帰ってこないし、科学部も指田せんぱい以外で対処してくれる人がいないし、それで捜しているんですけどね。あのせんぱい、いつもいないですよ。」

「彼も忙しいからね。よかったら私が見てあげるよ。」

「えっ、本当ですか？ぜひお願いします。」

パッと表情が明るくなる。なかなか見ていて楽しい子だ。

文化部の室長は先週の失踪事件以来、謹慎処分を受けて自宅待機となっている。局長が私に会ってきてくれというのも、そうした事情があったのこらししいのだが、実を言えばなぜ文化部室長が謹慎処分になったのかよく分かっていなかったりする。

坂田さんと文化部に行くと、指田くんが既に来ていた。

「ああ、指田せんぱい捜していたんです。」

「うん、ちょうど明子ちゃんから連絡貰ったものだから。」

指田くんは坂田さんの後ろにいる私を見つけると軽く会釈だけする。

「原因は？」

「またいつものハングです。たぶん、リセットしかないでしょう。」

「やらして貰っていいかな？」

「どうぞ。」

POWLA-TWIN を触るのは初めてだが、これも *POWLA* システムの端末である以上、操作にそう違いがある訳でもないだろう。しかし、*POWLA* の端末に触るのは実に久しぶりのような気がする。…と、よく考えてみればウイングダムも *POWLA* 端末の一形態であったっけ。

キーボードからいくつかのコマンドを送ってみるが、案の定何も反応がない。

「リセットして構わないんだな？」

「はい。」

リセットキーを探しだし、リセットしてみる。*POWLA-TWIN*は小さな悲鳴の後、正常なモードで立ち上がった。

「これで正常な状態に戻ってしまうんです。」

「今日は誰が操作していたんだ？」

「あ、あたしです。あたしが先月の教育関係のデータを呼ぼうとした時におかしくなったんです。」

「そのデータ名はいま正確に分かる？」

「えーっと、調べればたぶん分かると思います。必要ですか？」

「できたら今日中に貰いたいんだけど大丈夫かな？」

「はい、分かりました。」

あとで *CATELINA* を調べる必要がありそうだ。しかし、*POWLA* まで行かなくてはならないようだ。これはちょっと面倒だな。とりあえずは船が必要か…。

あとカルーンに誰か送らなければ…と、どうも委員長時代の悪い癖が出てきたな。今は全部自分で調べるしかないんだっけ。

なんか急にやるが増えてきたな。まあ、いいだろう。

「指田くん、至急調べて貰いたいものがあるんだが。」

「なんですか？」

「*CAPER*A の仕様書を手に入れて欲しいんだ。あと、下村室長に新しいインターフェースを一つ作るように言っておいてくれ。」

「インターフェースって *POWLA* のですか？」

「*POWLA-TWIN* の方に回路を追加したいんだ。詳しいことはあとで設計書を回すからと言っておいてくれ。」

「*POWLA-TWIN* にこれ以上何を追加する気なんですか？」

「お守りを作ろうかと思ってね。」

「は…？」

「とにかく頼んだよ。私は暫く外へ行って来るから。」

「はい…、えっ？」

私は右手をあげてまだ何か質問しそうな指田くんを制すると、そのまま文化部の部屋を出た。まずは E C に行かねばなるまい。

第五章 「風待ち草」

H6. 22. MAR

第六章 「太陽風交点」

局長に無理を言ってエシュードを借りだした私は、ステーション VC に来ていた。ここから *CATELINA* まではたいした距離ではなかったが、ファズアースの影響で足留めを食っていた。

しかし、そのお陰で意外な人物の姿を見つけることができたのかもしれない。

「まさかこんな所で会うとは思わなかったよ。」

「ええ、こっちこそ。だいたいいつ連邦政治局に帰ってきたんですか？」

「先週だけだね。」

だいたい情報部の高橋少佐とこんな所で再会できるとは思ってもみなかった。彼とは *MR-7* 星の爆発の時以来だから、もう結構と会っていないことになる。

「相変わらず情報部を出し抜くのが得意ですね。」

「聞いてなかったのかい？ たぶん EC の方は知っていたはずなんだが。」

「最近、情報部の命令系統が乱れているんですよ。しまいには誰が情報部の人間なんだか内部で間違えるんですから。いい加減なものです。」

「グレン大佐は元気でやっているのかい？」

「ええ、でも最近では政治局長のやりたい放題に振り回されて、余り自由ではないようですけどね。」
政治局長か…、あいつの考えそうなことだ。どうせ情報部さえ握っておけばなんでもできるとも思っているんだろう。

「ところで高橋少佐はどこへ行くところなんだ？」

「ファズアースですよ。まったくあいつのためにこんなところまで来ているというのに、どうしてあいつのせいで足留めされなきゃならないんだ。」

「そうだな…。」

まったくだと思う。たいした影響でもないのにいちいち足留めされてはかなわない。昔なら迷わずに飛び出したところだが…。いや、待てよ。

「よかったらちょっと私の手伝いをしないか？ なかなか見れない物が見れると思うが。」

「どこへ行くんですか？」

「*CATELINA* だよ。最近の *POWLA* のトラブル原因に思い当たるものがあるね。」

「*CATELINA* ってこんな区域にあるんですか？」

「ああ、まあトップシークレットだから君も知らないのも当然だけだね。」

「*CATELINA* に連れて行って貰えるなら何でも手伝いますよ。」

「よし、じゃあ、すぐに行こう。」

「了解！」

高橋少佐はニヤッと笑って私から離れていく。

これは割とよく知られていることなのだが、ステーションの官制は同時に二つ以上は管理できないのだ。だから無理矢理やりここから出たければ、誰か仲間同志と組んで 2 艇以上で同時に発進すれば簡単に出られる。

私もすぐにエシュードに戻ると、肉眼でフルーバーを捜した。上手い具合にエシュードの対面にいる。これなら楽にステーションから出られるだろう。

お互いに相手の動きを見ながら動きだす。私はパワーをほぼ全開まで上げると、一気に急上昇した。

高橋少佐の方は真っ直ぐ抜けたらしい。すぐに管制塔から何か言ってきたが思ったとおりに混乱している。2 艇の動きをトレースできなかつたらしい。

「あとは暫くマニュアルでついてきてくれ。」

「了解！」

ステーション V C から月に向かう。月の近くに *CATELINA* はあるのだ。意外な場所と思うだろうが、今では誰もが単なる地球と月の通信衛星と思っている。事実、そういう機能も持ってはいるんだが、ほとんど使用されていない。

CATELINA に入るためには方法が二つある。一つは *POWLA* の端末機からの操作とあとはパスワードで入口を開ける方法。パスワードは私が委員長時代に持っていたものが抹消されていなければ、使用できるはずだった。

「ここは U F ですね。こんなステーションに何の用があるんですか？」

「よく U F だと知っていたな。 *CATELINA* はステーション U F の中にあるんだ。知らなかつたらろ？」

「まさか…、だって、ここはリピーターの役目しか持っていなかつたはず。しかも現在は使用されていないのに。」

「情報部がまさかと言ってくれれば、まず当分は安心だな。」

「まあ、そういうことにはなりますね。」

私は U F に入ると昔の記憶をたぐりながら、*CATELINA* の入り口を捜す。高橋少佐もすぐに追いついてきた。

「大丈夫なんですか？」

「何が？」

「いや、確かここは立入禁止のはずでしょ。連邦委員長ならともかくとして、今の貴方では問題になりはしませんか？」

「このセキュリティはパスワードでしか管理していないんだ。パスワードさえ照合してしまえば、誰がいつここに侵入したかの記録はどこにも残らないんだ。」

果たして昔のパスワードが使えるかどうかのその一点にかかっていると言ってもいいだろう。もし、セキュリティシステムに引っかかった時には、あの政治局長の嫌な顔をもう一度見ることになるだけだ。

なんとか *CATELINA* の入り口を捜しだした。昔見たとおりにドアにテンキーが付いている。ここからパスワードを入力するのだが…。

「数字なんですか？」

「ああ、しかもパスワードは二つ入力するようになっているんだ。」

一つは個人情報、私個人に与えられたパスワード。もう一つが毎日変わるパスワード。とりあえず連邦委員長時代に与えられた数字を入力する。

「なんとか大丈夫のようですね。」

「問題はこれからなんだがね。」

二つ目のパスワードは確か一週間前の日付を並べた 8 桁の数字だったはず。これがかなりうろ覚えだったりする。まあ、やるだけやってみるか。

慎重に数字を入れていく。8 個の数字を入れ終わった瞬間、静かにドアがスライドして開いた。

「やりましたね。」

「ああ、なんとかね。まあ、あとはデータを引っ張り出すだけだ。」

私は真っ直ぐコンソールに就くと、先日のトラブルの情報を引き出した。高橋小佐は何か探るように *CATELINA* の中をうろうろと歩き回っている。

特に変わったデータは入ってなかった。先日のトラブルにしても、これを人為的なものと確定するだけの証拠にはならないものだった。ただ、どう考えても電氣的にはまるで問題が見られないというのがちょっと気になる。

CATELINA は物理的な破損や電氣的な故障であるなら、ある程度までは自己修復ができるようになっていて、つまり、その故障部分の回路を切り離すのだが、どう調べてもその切り離したはずの回路がないのだ。そこから得られる結論は一つしかない。

「何か分かりました？」

「ああ、誰かがここに侵入したらしいな。これ以上は分らない。」

「この情報は情報部でも流れていないんですよ。いったい、誰が…？」

「たぶんカルーンだろうが、どうやってここに侵入したかだな。ひよっとすると内部に手引きした人物がいるかもしれない。しかも、かなりの大物だ。」

そう、誰かがここに侵入し、そしてパワーを一回落としていた。何の目的で何のために？トラブルを完全なものにするなら何故わざわざパワーを元に戻していったのか？

考えれば考えるほど訳が分らなくなる。どっちにしてもカルーンがここに入出入りしているとなれば問題が大き過ぎる。

私はパスワードをもう一つ追加することにした。これで少しはもつだろう。

「何をしたんですか？」

「パスワードを変更したんだ。場合によっては回路を追加する必要があるだろうが、今日はこれで引き上げよう。」

「ええ、そうしますか。」

部屋を出る前にいくつかのデータをロックすると *CATELINA* から退散する。

さて、どうするか？せっかくここまで来たのだからファズアースまで行ってみるか？

「和岐さんはこれからどうするんですか？」

「どうしようか…？戻ってやることもあるんだが、一度くらいはファズアースにも行ってみたい気がするし…。」

「では、一緒に行ってみませんか？ちょっと確認してみたいことがあるんですが、ひよっとすると役に立つかもしれませんよ。」

「確認してみたいこと？」

「和岐さんは文化部の室長にはもう会いましたか？」

「いや、報告書を読んだだけだが。」

本当は局長に言われた時点ですぐ会いに行くはずだったんだが、生憎と EC に来てからというものまったく余裕がなくなってしまったのだ。とりあえず彼が書いた報告書にだけは目を通したが、彼からの話しを聞かずに外へ出てしまったのはうかつだったかもしれないと思っていた。「では、彼の報告書の中にファズアース圏内での特殊な特性について書かれていたのは覚えていますか？」

「ああ、あれについては本人から一度詳しく聞こうと思っていたんだ。」

「あれを確認しようと思うのですが、行きますか？」

「そういうことなら、一緒に行こう。」

ステーションUFから離脱すると今度はブルーバーの動きに同期を取ってやる。ファズアースももうかなりの距離まで地球に近付いてきているので、到着まで数分とかからなかった。

太陽系内に入っているというのにファズアースは丸い光の集合体だった。最初にこれを見たら誰も彗星だとは思わなかったろう。しかし、どう見てもこれを都市と見ることはできなかった。

「先入観で物事を捉えることはここでは通用しませんよ。」

頭の中に高橋少佐の声が直接響く感じ。この感じは以前一度だけ感じたことがある。

「もうファズアースの圏内に入っています。これぐらいで驚いているとあとがもちませんよ。」

半分は真剣に忠告しているが、半分は私が戸惑っているのを面白がっている、そんな感じだった。確かこの感覚は柴野中尉だ。MR-7星が爆発した時に感じたものと同じものだ。しかし、彼にESP因子があるなどという報告は受けたことがなかった。ということは、やはり佛木くんの報告を重要視しなければならないのだろう。

ファズアース圏内では、具体的な希望は必ず現実になんらかの形で影響を与える。この希望は具体的であるほど、その影響力は大きくなる。…と報告書にはあった。

そうか…、なんとなく意味が分ってきたぞ。

「どこかへ降りよう。リアムに会ってみたい。」

私はマイクに向かってそう話しかけると、慎重にエシュートをファズアースに降ろす。ほどなくブルーバーが真横にやってくる。

「会えますかね？」

「大丈夫、彼はもう私達の到来に気が付いているよ。」

ここはかなりのモヤがかかっている視界が悪いが、たぶんそれは私がファズアースについて具体的な印象を持っていないせいだろう。

「リアム、話しがしたい。私達の前に姿を現してくれ。」

心の中で思っただけでいいのだろうが、わざと口に出して言う。なんかこの方がより具体的であるかのように感じるができる。

周囲のモヤが次第に一ヶ所に集中してきて、やがてそれが人間の形になっていく。

「私を呼んだのはあなたですか？」

「ああ、そうだ。私は和岐という地球人だ。」

「ワキ…ですか？」

「そうだ。リアムに聞きたいことがある。」

明らかに困惑している様な表情を作る。それとも私がそう思っているせいだろうか。どっちにしてもリアムが答えるまでに少しの間があった。

「なんででしょうか？」

「今までにここに来た地球人を教えて欲しい。」

「4人います。」

「名前は分かるか？」

「ホトギ…、コハラタ…、ハスラム…、あと一人は分かりません。」

ハスラムがここに来ていた。では、局長に言ったことは嘘ではなかったんだな。しかし、いったい

どうやってここまで来たのか、それについては確かに興味がある。

「分からないとはどういう理由なんだ？」

「教えてくれませんでした。こちらも聞きませんでしたし。」

たぶんその分からない一人がカルーンの人間なんだろう。ファズアースにも来ているとなると *POWLA* に侵入されるのも時間の問題だな。

「もう一つ質問するが、何故ここでは具体的な希望が現実に影響されるんだ？」

「ここファズアースは精神文明が発達した世界です。精神が物質に影響を与えることで都市が形成されているのです。詳しい理由は我々にも分かりません。しかし、地球人には特別に影響が強くなるようです。」

まあ、そんなところだろうとは思っていたが、これを解析するには時間がなさ過ぎる。たぶん、このファズアースが次に地球にやってくる時には私は生きていないだろうから。いや、待てよ。ファズアースが彗星でないのなら、なにも周期的に地球に近づくわけではないな。

「君たちはどこから来たのか？」

リアムの表情にノイズのようなものが走る。

「それには答えられない。」

明らかに今までのリアムとは別の声だった。今までのリアムの声はどちらかというと女性的な感じがあったのが、今の声は完全に男性の声だった。

「どういうことだ？」

「上の者からの指示です。それには答えられません。」

「上の者とは誰だ？」

「それも答えられません。」

いったいどうしたのか、リアムの態度がいきなり硬化してしまった。リアムは上の者という表現を使った。ということは、リアムよりさらに強い力関係の何かが存在するのだろう。

「分かった、私の質問は以上だが、高橋少佐は何か？」

「地球に近付いているのは意識的なのか？それとも偶然なのか？」

気のせいかリアムの表情が一瞬ぼやける。

「偶然とも故意とも言えます。我々全体の意思がファズアースの航路を決定します。今回地球に向かっていているのはその全体意思の結果なのです。」

「では、航路を変更してくれ。このままの状態では地球に近付かれては、地球は大混乱になってしまう。」

「分かりました。航路を変更します。地球には接近しません。」

「ありがとう。」

そういや、地球がファズアース圏内に入った時に地球人の欲望が現実に影響を与えてしまったら大混乱だな。情報部がどうしてここまでファズアースに拘っていたかやっと理解した気がする。

リアムは再びモヤの状態に戻るといつの間にか消えてしまった。

「さあ、信州に戻ろう。我々には地球でまだやらなければならないことが残っている。」

「はい。」

私はあと一つどうしても実験したいことがあった。その結果が出るのはまだ先の話だろうが、やってみるだけの価値はあるだろう。そう、ファズアース効果の持続性については誰も確認していな

いのだ。

ひよっとするとこれで *POWLA* の問題も簡単に解決するかもしれない。

第六章 「太陽風交点」

H6. 22. MAR

第七章 「風神」

ハスラムと共に再び局長の前にいた。局長はハスラムが差し出した書類の束を前に難しい顔をしている。

「昨日、情報部部长から推薦書が回ってきた。君がどういう方法を取ったかは知らんが、とりあえず君を信用するしかないようだな。」

「では、認めて頂けるのですね。」

「仕方あるまい。受け取りたまえ。」

局長はデスクの引出しからIDカードを取り出すとハスラムに差し出す。

「一応、情報部勤務を認めるが、指示系統は和岐くんに従って貰う。」

「はい、それで結構です。」

「それと階級は中尉だ。以上、質問がなければ下がってよろしい。」

「ありがとうございます。」

そういえば私の階級はいったい何なんだろう？連邦委員長になる前は一応大尉の階級は付いていたが、現在は科学部付の身分だし、さりとて事務員という訳でもなさそうだし。まあ、どうでもいいことだが。

私とハスラムは局長室をあとにして科学部に向かう。

「とりあえず新しい POWLA システムの開発に協力して欲しいのだが。それ以外は自由に行動して貰って構わないから。」

「リアムには会ってきたのか？」

「ああ、会ってきた。」

「では、私がファズアースについてすることはもうないだろう。喜んで POWLA の開発に協力させて貰うよ。」

「君に会わせたい人物がいるんだ。」

科学部の部屋を覗いてみるが、生憎と指田くんも室長もいなかった。たぶん、研究室の方にでもいるんだろう。

「研究室の方に行ってみよう。ひょっとしたら私が頼んだインターフェースができ上がっているかもしれない。」

POWLA-KNIGHT の開発のためにいつの間にか研究室ができていた。最近は一日のほとんどを指田くんはそこで過ごすという話だった。

以前は情報部が使用していたという地下 2 階の部屋は、すっかりと POWLA 関係のパーツで埋めつくされていた。電源とケーブルの山の中で指田くんは POWLA-TWIN2 と格闘していた。

「指田くん、ちょっといいかな？」

「あっ、和岐さん、どこへ行っていたんですか？」

「ちょっと局長の所へね。ところで紹介したい人物がいるのだが、今いいかい？」

指田くんは答える代わりに無言でハスラムを手の平で差し示す。

「よかったら少し出ないかい？今日は朝からずっとここに籠ったままだろう。」

「そうですね。じゃ、どこに行きますか？」

「サイゼリアでどうかな？ちょうど食事もしたいし。」

「ええ、私はそれで結構です。」

ハスラムも黙って肯く。

サイゼリアは信州局の建物のすぐ裏手にある。店内はちょっと狭いが話しをするにはなかなか雰囲気がいい。

私はピザとジンジャーエールを注文すると改めて二人を紹介することにした。

「こっちは科学部の指田大佐、元は開発部に籍があったんだが、現在は *POWLA* の新システムの開発に専念して貰っている。」

「開発部…、ああ、サイボーグの…。おっとこれは言うてはいけなかったかな？」

「いえ、知っているならその方が余計な気を使わなくて済みますから。」

「そしてこっちはハスラム。さっき情報部員になったばかりだ。これからは *POWLA* の開発に協力して貰うつもりなのでよろしく頼むよ。」

「指田です。よろしくお願いします。」

「こちらこそ頼むよ。」

二人が握手を交わしている間に料理が運ばれてくる。

「ハスラムさんはいったいどういう関係の人なんですか？」

「私の学生時代の友人なんだ。昔から人の秘密を探るのが得意でね。とにかく必要な情報は彼がすべて調べてくれる。」

ハスラムの方をチラッと見ると、彼はピザを口にしながら肯いている。

その瞬間、頭の中を何かのイメージが駆け抜ける。本当に一瞬のことでいったいそのイメージが何だったのか、自分でも分からなかった。ただ、それがハスラムに関係していることだけが漠然と感じていた。

「*POWLA* についても彼を使ってくれて構わない。ただ、私もハスラムが *POWLA* をどこまで知っているのかは知らないから、その辺は適当に話し合っ欲しい。」

「はい、分かりました。」

指田くんは持っていたシステム手帳を広げて何か書込み始める。かなり使い込んでいると見えて、その外見はボロボロだった。

「和岐さんから依頼されたインターフェースは完成しています。ただ、*CAPERA* 側が実験を拒否しているので、まだテストはしていませんが…。」

「どうして拒否しているんだ？」

「そりゃ *CAPERA* 側の人間にしてみれば、アクセスの割り込みがかかる度に内容をチェックされる回路なんて歓迎しませんよ。第一こんなことが利用者の中に広まったら、向こうの利用者は減ってしまいますからね。」

POWLA 中心に考えればこれほど手軽にできる対応策はないんだが…。まあ、仕方あるまい。とりあえず *POWLA-TWIN* にだけでも付けておくか。

「それと和岐さんは知らないと思いますが、以前シモさんの方でも *CAPERA-SEND* というインターフェースを考えていて、実験直前でトラブルっているんですよ。たぶん今回のこともそれが尾を引いているんじゃないかと思うんですが。」

「分かった。で、*POWLA-KNIGHT* の進行状況は？」

「ほぼ完成しています。ただ…。」

「ただ…？」

「*CATELINA* と *ANDREA* に代わるものがまだ全然進んでいないのと、*NFL* に代わる物となると構想すらない状態なんです。」

「ソルトリバー研究所の方に話しはしたのか？」

「そっちは室長に任せてあるのですが、室長自身が忙しいので全然会ってないんです。どうなっているのか私の方ではちょっと分かりません。」

「とりあえずデータベースの方は、そのまま *CATELINA* と *ANDREA* を使用する方向で進めたらどうだろう。どっちにしてもあと数カ月とは思われるが、それが理由でせっかくの *POWLA-KNIGHT* が使用できないのは惜しいと思う。」

POWLA のトラブルは相変わらず増え続けている。あと何ヶ月かでたぶん使い物にならなくなるだろう。連邦政治局内だけの問題なら我慢もできるが、住民の生活に支障が出てしまうのはなんとしても回避しなくてはならない。

「ハスラム、君の意見は？」

「そうだな、技術的なものに関してはとりあえずコメントは避けるが、*CAPER*A 側の組織についてなら調べることができると思う。」

「それはカルーンも含んでと解釈してよろしいんですか？」

「もちろん、そう思って貰って構わない。事実 *CAPER*A とカルーンの繋がりはある程度まで調べがついている。もう少し待ってくれば実験ぐらいはできるようになるはずだ。」

また…？また何かが頭の中をよぎる。今度はさっきよりもやや鮮明だ。確かにハスラムについて何かが起き始めている。それとも私の方が変わり始めているのだろうか？もしかするとファズアースでの実験の結果が出ているのかもしれない。

ファズアースを去る際に、ファズアース効果の持続性について確かめたかった私はある希望を願ってみた。それはこれ以降いかなる時でもファズアースに依存せず ESP 能力を持ち続けることを願うというものだった。もし、これが可能ならファズアースはとんでもないパンドラの箱となってしまう。

私は目の前のピザに集中してみた。もし私に ESP が使えるなら動かせるかもしれない。

「和岐さん、どうしたんですか？」

「えっ？」

指田くんが不思議そうに顔を覗き込んでいる。

「いや、何でもない。ちょっと *NFL* について考えていたんだ。」

「それならいいですけど…。」

やっぱり人がいるところでは駄目だ。

「来週から科学部、情報部、文化部合同での対策会議を開こうと考えているんだ。科学部からは指田くんに出て貰いたいんだが。もちろん、後で室長には許可を貰っておくから。」

「はい。分かりました。」

「ハスラム、君もオブザーバーとして参加してくれ。」

「ああ、分かった。」

「さあ、来週から忙しくなるぞ。」

白と出るか黒と出るかやるだけやってみるしかないな。これは木星でオレンジを作るよりかは面倒

かもしれないな…。

第七章 「風神」

『故郷の風に誘われて』 —空翔ける羊飼いの群れシリーズ 3—

H6. 23. MAR